Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-07-27

中尾先生の思い出

寺島, 俊雄

(Citation)
のじぎく通信,60:42-49

(Issue Date)
2014

(Resource Type)
article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003024

中尾先生の思い出

神戸大学大学院医学研究科教授（神経発生学分野）
寺島俊雄

図１　中尾泰右先生

私が大学受験に臨んだのは昭和四十五年であるから、今から四十五年ほど前のことである。ちょうど赤軍派による「よど号ハイジャック事件」があった年である。当時の国立大学の入学試験は一期校、二期校の二つに分かれていた。私は一期校は京都大医学部、二期校は群馬大医学部を受験したがともに不合格だった。三月末に家を離れて西船橋にある予備校の寮に入寮し、そこから都内の予備校に通った。浪人生活を開始して一か月ほど経過したころ秋田大医学部の入試があった。秋田大医学部は戦後初めてできた国立大医学部で、同じ年に私立では北里大医学部（神奈川県相模原市）と川崎医大（岡山県倉敷市）が認可された。当時は医学部の新設は不可能と思われていたので、秋田県が国立大医学部の誘致に成功した時は奇跡と言われた。この三医大の設立後、翌年から各県一医大の政策により

新設医大が雨後の筍ごとくできた。時期遅れの入学試験の倍率は高かったので受かるとも思わなかった。五月三日の入学試験後、秋田に二度と来ることもあるまいと思い、市内の千秋公園の遅い桜を見物した。綺麗だった。その夜、夜行列車に乗り、翌朝上野に着いた。西船橋の予備校の寮に戻ったときは、同室の仲間は皆予備校に出た後で誰もいなかった。もともと医学部志望でもなかったし、来年は理学部を受験しようと心に決めてシャワーを浴びて寝た。ところが五月八日に予期しない合格通知が来た。そして五月十五日に一か月遅れの入学式があり、その日は秋田県男鹿半島の国民宿舎で入学オリエンテーションがあった。

当時の学部長の六年一貫教育の方針でカリキュラムに一年生から専門科目の生化学と解剖学が入った。他の専門科目が入らなかった理由は、単に教員が生化学の奥原英二先生（北大卒）と解剖学の中尾泰右（たいすけ）先生（岡山大学卒）の二人しかいなかったからだと思う（図1）。残りの教員は一期生の学年進行に合わせて着任することになっていた。医学部キャンパスの建設予定地は太平山を望む秋田市の郊外に確保されていたが、入学当時は整地作業が行われていた（図2）。基礎医学校舎も附属病院も何も無かった。同級生は皆、いったい自分たちが卒業して医師になれるのか不安に感じた。戦後、失火により焼失して

図2　昭和45年5月創設当時の秋田大学医学部建設予定地

廃校となった秋田女子医専と同じ運命を辿るのではないかと思うものもいた。他大学の受験を目指して早々に退学して秋田を去った同級生も数名いた。そんな環境の中で解剖学を担当した中尾先生は、渾身の力で私たちを医学への道に導いてくださった。その中尾先生が平成二十五年七月八日に八十歳で亡くなった。私は中尾先生に出会わなければ、解剖学を生涯の仕事とはしなかったであろう。

昭和四十五年五月末あるいは六月のある日の午後だったと思うが、秋田大学鉱山学部の古い木造校舎の二階で始まった解剖学の講義が中尾先生との最初の出会いではなかったろうか。旧燃料化学科の教室の引き戸を開けて少し前屈みに入ってきた先生は、浅黒い精悍な顔つきで古武士のような雰囲気を漂わせていた。一年次に開講された専門科目の講義ということもあり教室に一瞬緊張が走った。先生は最初に教養課程の

一年生に専門科目の解剖学を教えた経験がないことを仰ったと思う。専門課程の学生ではなく新入生の前で先生も戸惑っていたのだろうと思うが、ただちに講義を開始した。ラテン語と日本語の学名を併記して板書し、色チョークで模式図を描きながら進める講義は格調が高かった。しかしあまりに板書のスピードが速いため、またその声が小さく聞き取り難いため、私は早々に筆記を諦めた。そしてただシャワーを浴びるように中尾先生の講義を拝聴することにした。

講義では厳しい印象が勝る先生であったが、教授室に質問に行くととても親切であった。中尾先生の教授室は、鉱山学部の敷地内の古い木造の平屋建てだったと思う。そこに腸間膜について質問に行った時のことである。先生は青鉛筆で消化管の断面を、赤鉛筆で腹膜をザラ紙に書いて丁寧に説明してくださった。そして「今はわからなくて良いですよ。実習すると理解できます。」と仰った。あれから四十五年も経ているのに、赤と青の色鉛筆が中央で接して一本になったトンボの色鉛筆（赤青鉛筆というのだろうか？）を見るたびに、当時の中尾先生が描いてくれた腸間膜の模式図を私は思い出す。そして今でも同じ絵を用いて私は学生に腹膜とその発生を教えている。

二年生のときは解剖学の講義は無かったと思うが、三年生の人体解剖学実習の指導は厳しかった。現在では多くの医科大学で解剖学実習は三十回ほどであるが、当時はその倍以上はあったと思う。その上、デイリーレポート、マンスリーレポートと形を変えていくつものレポートが課せられる。同級生は皆、深夜に至るまで解剖学実習室で剖出に励み、それぞれの課題に熱心に取り組んだ。そして明け方近くに下宿に戻り、仮眠する毎日であった。私は、たぶんストレスが嵩んだためだと思うが、ある日のレポートの隅に「これからチャップリンの映画ライムライトを見に行きます」とだけ書いて提出し、実習室を早めに去った。市内の映画館で初めて見たチャップリンの映画に感動したのは良いが、翌日叱責されるのではないかと気が重かった。案の定、中尾先生が私たちの実習テーブルに来たときは観念したが、にこにこと「寺島君、映画は面白かったかね？」と尋ねられたときは内心ほっとした。中尾先生には慈父のように優しい一面があった。

中尾先生の解剖学の教育を受けた学生は誰しもあの厳しい口頭試問を思い出すことだろう。自分の人生を振り返ってみると、あれほど激しく勉強したことはない。解剖学の口頭試問は数日間に及んだが、私は昭和四十七年十二月のクリスマスイブの日に試験を受けた記憶がある。私が引いた真新しいカードには無情にも Sinus durae matris とだけあった。「硬膜静脈洞」は神経解剖学の範

囲だと思っていたので脳の血管系については勉強は一切していなかった。回答に困った私を助けるためであろうか、中尾先生は「硬膜静脈洞は、何膜と何膜の間にありますか？」と質問された。良くわからぬままに「硬膜とクモ膜の間にある」と当てずっぽうに回答したが、ここは「硬膜の内葉と外葉が部分的に開いたところ」とすべきであった。次に海綿静脈洞を貫く構造物について質問された。当時はその質問の意図がわからなかったが、海綿静脈洞を貫く構造物には、内頚動脈、三叉神経第一枝、動眼・滑車・外転神経、上眼静脈などがあり、これを知らないと海綿静脈洞症候群（フォア症候群）の臨床症状を説明できないのである。最後に海綿静脈洞と連絡する導出静脈について先生は質問された。海綿静脈洞と連絡する導出静脈は、顔面の炎症が脳へ波及する経路として臨床的に重要である。中尾先生は何とか私を合格させようとして手を変え品を変えて質問したのだと思うが、全く解答することができなかった。当然のことながら解剖学は不合格となり、冬休みは秋田に残り年初に行われる再試験に備えて勉強した。明けて昭和四十八年一月四日の再試験のときに引いたカードは Aorta abdominalis だった。最初の試験がこの問題であればと思いつつ、腹大動脈の枝を上位から下位に向かって順に説明し、最後に正中仙骨動脈と尾骨小体に回答が及んだとき、中尾先生が一瞬うれしそうに微笑まれたことを生涯忘れはしない。この二度の解剖学の試験勉強が現在どんなに役立っているかと思うと、試験に落としていただいたことに感謝するのである。中尾先生は妥協なき厳しい口頭試問をご定年まで続けたと想像するが、公平無比で誠実な先生に解剖学の教育を受けたことは幸いだった。

学年が進行すると中尾先生と会う機会も次第に乏しくなったが、夏休み中、教養部のプールで何度か中尾先生とそのご家族にお会いした。私は夏休み中は水泳部員としてプールの管理の仕事をしていた。中尾先生の三人（あるいは四人であったか？）のお子さんが、プールの中で、中尾先生の腰やくびにまとわりついてはしゃいでいる光景が実に微笑ましかった。中尾先生が水の中で困ったようにただ佇んでいたのが可笑しかった。

私たち一期生の学年進行に合わせて教員や設備が順次整っていくのであるが、なぜか附属病院は私たちが卒業するときまでに完成しなかった（図3）。秋田県立中央病院を国立に移管して、そこで私たちは臨床教育を受けていた。今思うと設備が不十分な中で随分と優秀な先生方がそろっていた学校だったと思う。放射線科の高橋先生（熊本大教授）や玉川先生（岩手医大教授）、血液内科の柴田先生（新潟大学長）、呼吸器内科の大久保先生（横浜市大教授）、小児科の東先生（チェディアック・東

図3　昭和50年5月　建設中の附属病院。遠くに見えるのは太平山。

病の発見者）や藤原先生（岩手医大教授、肺サーファクタントの人工合成）などを思い出す。私は卒業時に進路に迷ったが解剖学に進むことにした。学生のときにまともに勉強したのは解剖学と生理学ぐらいしか無かったし、何となく医師に向かないと感じていたからである。今も昔も基礎医学に進むには大学院に行くのが必須であるが、学業を続ける金銭的な余裕は私にはなかった。幸い自力で都内の私立医大の解剖学助手のポジションを見つけることができたので、昭和五十一年三月、卒業と同時に秋田を離れた。本当の中尾先生の凄さを知ることになったのはそれからのことであった。昭和五十二年三月、山口県宇部市で開催された日本解剖学会総会に参加したときだと思う。後方の席に座り、先生の研究発表を隠れるようにして拝聴したが、その内容が実に素晴らしく度肝を抜かれた。私は中尾先生は肉眼解剖学つまりマクロ解剖の専門家だと思っていたが、研究者としての先生は電顕つまりミクロ解剖の専門家だった。中尾先生のスライドは、低倍の光顕写真から始まり、ついで電顕の低倍写真になり、最終的に高倍の電顕写真で細胞膜や細胞小器官の所見を示すのである。そして光顕写真も三十五ミリフィルムではなくて大判のブロニーフィルムを使用していたからとにかく迫力があった。電顕も多孔メッシュでなくて単孔メッシュにフォルムバールを貼っていたから、低倍の電顕写真にまったくメッシュの影が無く、光顕写真ではないかと見まごうぐらいであった。とにかく中尾先生のスライドは低倍から高倍に至るまでシームレスで、あたかもロングショットに始まり次第にクローズアップに至る映画を見る思いがした。技官の鈴木悟先生（故人）の技術が高かったこともあると思うが、中尾先生の光顕写真と電顕写真は「科学」というより「芸術」の域だったと思う。学会場の片隅で排泄腔や体節の低倍電顕写真の美しさを見た感動は、四十年ほど経過しても忘れることができない。

中尾先生は研究論文が出版されるといつもリプリント（別刷り）を私に送ってくださった。先生の生涯の研究

論文は三十数編だと思うから決して多い方ではない。しかし、いずれもその完成度が高いのである。そしてほとんどの論文が一人あるいは二人の著者に限られ、しかもその大半が中尾先生がトップオーサー（筆頭著者）であった。教授職につくとラストオーサーにまわり論文のトップオーサーになることは稀だが、中尾先生は生涯トップオーサーとして論文を書いた。昨今の大学ではマネージメント能力が教授に求められ、その分だけ教授自身の研究が見えにくいが、中尾先生は自分自身で研究し、トップオーサーとして論文を書くという「一研究者」としての立場を生涯貫いた。しかもその論文の大半がJ. Cell Biol. をはじめとして形態学の一流雑誌ばかりなのである。中尾先生が通常レベルの教育者・研究者ではないことは学生のときからうすうす理解していたつもりであるが、これほどまでに頭抜けているレベルの研究者であるとは思ってもいなかった。私は少しでも中尾先生の学問レベルに近づきたいと心に決めた。そして何年かして私も国際誌に毎年一報ずつ論文を掲載できるようになり、それなりに解剖学の分野で生きていく自信のようなものが生じた。そんな矢先の昭和六十二年、J. Comp. Neurol. のある号を見たときは驚愕した。「ヤツメウナギの脊髄」に関する中尾先生と石澤先生による共著論文が四本も同時に掲載されたのである。総ページ数にして五十七ページに及び、脊髄の比較解剖学的研究として金字塔となる論文であった。やっと先生の足元ぐらいまで達したと思ったのも束の間、もうその背中が見えないくらい一挙に離されたと感じた。先生のレベルは私とは異次元にあると感じ、追いつくことはあきらめた。

その一、二年後だと思う。解剖学会の地方会や総会のたびに中尾先生に仕事の進捗と近況を報告していたが、ばたりと先生に会わなくなった。中尾先生は体調を崩されて冠状動脈のバイパス手術を受けたのである。その後も腹大動脈瘤の手術を受けるなど、しばらくの間、先生は闘病生活を余儀なくされた。研究者として油にのり、まさにそのピークの時に、大病をした中尾先生の気持ちは如何ばかりであったろうか。けれどもその数年後、回復された中尾先生は研究活動を再開し、前にもまして美しいスライドで聴衆を魅了した。

平成十一年三月に中尾先生は秋田大学医学部を定年退官された。以後、学会で会うこともなく先生との交流は途絶えた。ただ人づてに秋田で医師として働いたのちに、仙台に戻ったということを知った。そして平成二十三年三月十一日、あの東日本大震災が起こった。先生のご自宅は仙台市の若松区で仙台市では津波でもっとも被害があったところである。幸い先生は無事であったが、避難所での生活でひどく健康を害された。秋田に在住してい

た息子さんが、決死の覚悟で孤立した仙台に車で向かい、避難所から先生を救いだし、秋田大学医学部附属病院に搬送された。後日、落ち着いてから先生に電話で連絡をとったところ、避難所はとにかく寒かったと述懐された。地震から数か月後に再び先生は仙台に戻られた。

平成二十三年十二月、私は「神経解剖学講義ノート」という簡単な学生向けテキストを金芳堂から出版した。謝辞には「学生の時に中尾先生の教えを受けなかったら私は路頭に迷ったことだろう」と書いた。けれども私はこのテキストを先生に献呈することはできなかった。中尾先生は、常々、私に簡単な仕事をしてはならないと仰っていたからである。そして、英語で国際誌に論文を書くことにより、自分の科学的立場が正しいかどうか世界中にアンテナを張ることが大事であると繰り返して主張された。だから簡単な日本語の神経解剖学の入門書を先生に送ることは恥ずかしくてとてもできなかった。しかし出版の数か月後、叱られると思ったが、やはり学生のときに解剖学を教えていただいた恩義に対して感謝の意も含めて先生に「講義ノート」を送ることにした。数日後思いもかけず先生よりお褒めの葉書きをいただいた。パソコンで細かい字でびっしりと印字された葉書を読むと、「初めて知り理解できたところも多くとても新鮮な気持ちで読ませていただきました。入門書として、とても行き届いた内容の著作と思います。」とあり、本当にうれしかった。しかし、同じ葉書にクモ膜を「結合組織性の膜」と私が記述している点について、「クモ膜は中枢神経系を髄液に浸し環境を維持するために上皮性の構造をもつ」ことを先生は指摘された。そしてさらにその翌日に再び葉書が届き、クモ膜に関するご自身の考えを繰り返された。確かに中尾先生が主張されるようにクモ膜は神経堤に由来し、外胚葉としての上皮性の性格を色濃く持っているのである。晩年まで若い時の研究心を失わない中尾先生に驚かされた。

あの地震の翌年の平成二十四年の中尾先生の年賀状には、「三月十一日の震災ですっかり体調を崩し入退院を繰り返し、やっと小康を得るまでになり今は仙台に居ます。限界まで体力を消耗し尽くした感じがしますが多くの人に助けられ少しは歩けるところまで回復しました。ただ感謝の日々ですが一日一日を大切に生きていきたいと思っています。」と書いてありました。この年賀状を読んであらためて東日本大震災が中尾先生の体力を奪ったことに気付かされました。もしあの地震が無ければ、先生はこんなに早くお亡くなりになることはなかったろうと悔やまれる。

もう先生に論文をみてもらうことも、褒められたり、叱責されたりすることもない。敬愛する中尾先生のこと

を思い出すたびに、私は辻征夫（つじゆきお）の次の詩を思い起こす。
この詩は、駅売りの週刊誌か何かで偶然見つけたもので、
私はそのページを破り手元に残しておいた。中尾先生、
長い間、ご指導、有難うございました。

宿題　　辻征夫

すぐにしなければいけなかったのに
あそびほうけてときだけがこんなにたってしまった
いまならたやすくできてあしたのあさには
はいできましたとさしだすことができるのに
せんせいはせんねんとしおいてなくなってしまわれて
もうわたくしのしゅくだいをみてはくださらない
わかきひにただいちど
あそんでいるわたくしのあたまにてをおいて
げんきがいいなとほほえんでくださったばっかりに
わたくしはいっしょうをゆめのようにすごしてしまった

（平成二十六年四月二十九日）